

## 審査の結果の要旨

氏名 植阪友理

本論文は、教育実践と心理学的研究を結びつける枠組みとして“REAL (Researching by Extracting, Analyzing, and Linking) アプローチ”を提案し、数学的問題解決における学習スキルという具体的なテーマにおいて、その有効性を示そうとするものである。

教育心理学や認知心理学の諸領域では学習スキルに関わる様々な研究がすすめられてきた。一方、学習スキルの育成は教育における重要な課題であるにもかかわらず、現在の学校では十分な指導が行われていない。こうした研究と実践の乖離を解消するために、REALアプローチは、以下の3つのフェーズに沿って研究をすすめることを提案している。

フェーズ1：問題点の抽出 (Extracting Students' Problems)：従来の心理学的知見を利用した学習支援活動や実態調査を行う中で、現実的な問題点を抽出する。

フェーズ2：心理学的検討 (Analyzing with Psychological Methods)：調査や実験などの心理学的研究手法を用いて、要因分析、指導法開発、効果検討などを行う。

フェーズ3：学校の集団指導における実践 (Linking Findings to School Practices)：得られた研究知見を実際の学校現場における授業実践として現実化する。

第I部で、先行研究を概観したあと、第II部以降、具体的に本アプローチを用いた一連の研究を行っている。フェーズ1にあたる第II部では、まず、研究1として個別学習相談の一方法である「認知カウンセリング」を行い、学習者の実態から、学校では教師が多く図表を用いながら教えているにもかかわらず、学習者自身は自発的に図表を利用していないという問題点を見出している。研究2では、学力・学習力診断テストCOMPASSを用いた調査から、適切に図表を利用できない児童・生徒が多く見られることを示している。

フェーズ2として、第III部(研究3、4)では、図表の自発的な利用には、図表への変換コストという課題要因や、学習者のスキルという個人差要因が関わっていることを明らかにしている。第IV部(研究5～8)では、図表の有効性の意識と図表作成スキルを高めること、場面に応じた適切な図表の使い分けを促すこと、学習者同士の説明の道具として図表を使わせること等を提案し、指導法の開発と実験授業による効果検証を行っている。

フェーズ3にあたる第V部(研究9、10)では、これらの研究知見を生かした学校教育実践として、研究者が支援しつつ、学習者の授業改善を直接的に図る授業、および、教師による学習相談活動が授業の変化をもたらす間接的に授業改善を図るという体制作りを提案し、長期にわたる学習者行動の変化から、これらの有効性が検証されたとしている。

本論文の提唱するREALアプローチは、教育実践をまず行ってみることによって、教育上の問題点と従来の研究で不十分であった点を見出す点や、心理学的研究から得られた知見がどのように現実に利用可能かを示す点で、心理学研究と教育実践の双方の発展にとって有用であることが具体的なテーマを通じて示唆された。また、学習スキルの支援にかかわらず、様々な問題において適用可能であることから、広く教育研究に貢献すると考えられる。よって、博士(教育学)の学位にふさわしい論文であると評価された。